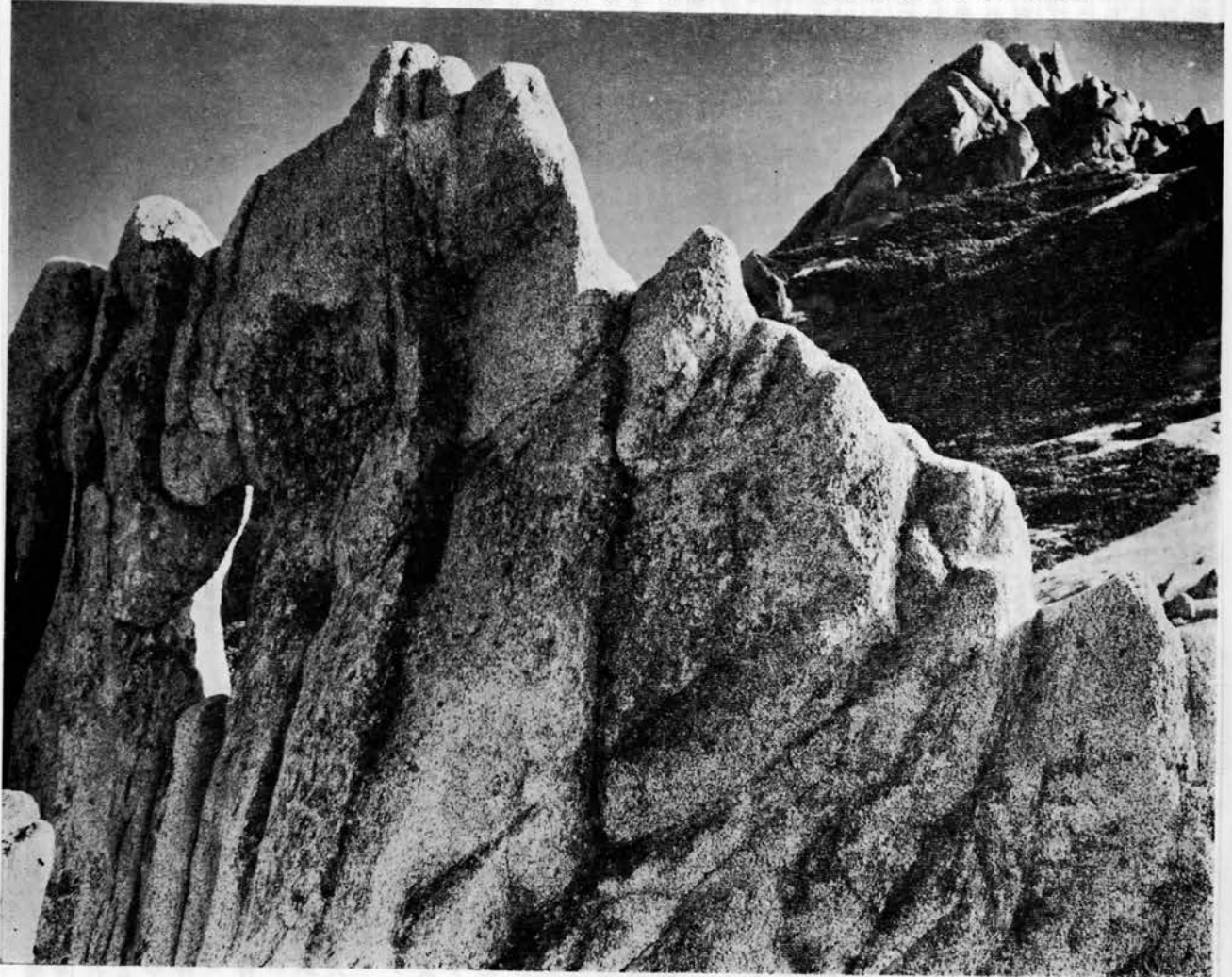


# 山と博物館

第13巻 第6号 1968年6月25日 大町山岳博物館



## 自然の天敵？

北アルプスの残雪が緑に映える季節になると共に、山岳博物館を訪れる観覧者も日毎に増ってきているようである。

博物館の周囲の緑も一段と美しくなった。この緑の中で博物館を一層楽しいところのようにと、園内のラベルの整備やら植樹に努力している。

木を一本植えるのにも周囲とのバランスを考えて植えているのを知ってか知らずか、それを引き抜いて行く不心得者が今年に入ってから後を断たない。

園内にたくさんあるレンゲツツジは、近頃の盆栽ブームで聞くところによると東京では三万円もするとか。

しかし、こゝで引き抜いて行くのは盆栽の知識どころかまったくの興味本位のもので、引き抜いた植物の根は裸のままぶら下げている者がほとんど、家に着く前に枯れてしまう事は目に見えている。

この不心得者は、県外のバス団体の観覧者の中でも女性が圧倒的に多く、男性が引き抜いているところは余り見かけない。

中年のご婦人などは説明中の館員の目の前で堂々と引き抜いている。

たまりかね「草木は取らないで下さい」の看板を要所々に吊したが、無いに等しい。看板を見て、それから人目の無いのを確かめてサット引き抜いて行く。

ア然として怒りより、悲しさが先に立つ。自然を自然のままに楽しむ心のゆとりがなくなりつつあるのだろうか？

一方ではサットばかりに引き抜き、片方は又植えなおす。

こんなイタチゴッコを何年続けたら良いのだろうか。

近年北アの観光開発は各所で行なわれている。観光開発も誠に結構であるが、不心得者が意外に多い事も考え併せ「自然の保護策」も充分に研究していただきたいものである。

(千葉 彬 司)

# 北アルプス北部の山今昔

(二)

……後立山連峯を中心として……

## 長沢武

### 一、山名考 (一)

(1) 古山名について (二)  
 明治四二年といえは維新後の文明開化も大部進み、教育も充実し充分普及した時代ですが、こと高山に関しては前号に見るようによくお話しにならない未開状態でした。これは辻本氏も言っているように、当時山というものが如何に世間から閑却され、等閑視されていたかが解りましよう。

当時としては、奥山はなんら生活的にも経済的にも教育的にも価値が無く、従って関心の文章を表にして分析してみますと(第一表参照)、山岳の配列順は原典のまま、アラビア数字は筆者注、同数字のものは同山異名)現在名の(イ)に対して(ロ)(ハ)(ニ)と順次正確度を増し、實際現地を歩かれた三枝氏の(ホ)では、実際の山の配列順と一致しているのみならず、呼称においても現在名に近いことに気付きます。もっとも誤の多い(ロ)については、唐松岳の山名の記録がなく、赤鬼岳を大黒岳と別の山として鹿島槍の南に持って行った、鹿島槍岳については、五竜岳と解してか解せずにかやがり鹿島槍の南の山として載せて、鹿島槍と祖父岳の間にこの二山があるようになってる他、祖父岳の南にまた鹿島大岳、後立山を載せていますが、こんな地図をあてにして三〇〇〇近い未開の山を歩いた当時を思えば良くまあ遭難しなかつたものと考えるだけ

でもゾツとします。

さて、第一表でもお解りのように、明治四〇年代以前のアルプスの奥山についての知識は一般に混沌として、同山異名はまだ良いとして古文書を見ると高瀬川入りの奥山などは、三〇〇〇に近い立派な山でありながら名前が無い山が多かつたようです、鹿島槍のように、幾つもの名前が付けられ、時代と共にその名前が変つて来たものや、薬師岳や鉦ヶ岳のようにどの山を称したかはっきりしないものなどいろいろあります、特に名称において大きな相違をみるのは地域による呼称の違いで、富山、新潟、長野と、アルプスを境にして一般にはそれ／＼交通、文化、経済行政とあらゆる面で交流を全くみない、無縁交渉の状態が明治まで続いていたわけで、同一の山をその裏表からそれ／＼の地域で別々の呼名で呼んでいたもので、もち論お互にそんなことは露知らず、また関心を持つ必要も無かつたわけ です

A 記録に残る山残りぬ山

#### (イ) 無名山

山の名前について考えてみますと、山麓近くのものについては全国各地、頂のある所必ず名前がついています。ところが奥地に行くに従つて無名山が多くなつたり、名前があつてもそこに関係のあるほんの一部の人しか使われないから一般化しない場合が多くなります。最初山ありきで、その山に人間の匂い

がするようになると、対話や記録の便宜上地名を付けないと、特定地点の表現、表示に困るわけで、最初に名前を付けられる山はそれだけ人間との関係が深く、いろ／＼の対象となる山で、対人関係の少ないか全くないものは現在でも無名山であり、無名地であるわけです。

第二表は、一七〇〇年代以後の代表的、特に山岳名を良く載せている書物に載っている山名を表にしたものです、現在の山名から比べると如何に無名山が多かつたか、対人関係が薄く、関心が低かつたかが解ります。信府統計といえは中信地方の古典中のエンサイクロペディアともいべき、全三三巻に及ぶ膨大なもので、松本領内の総合記録書ですが、爺岳以前の前山では不動岳と双六岳それに爺鬼岳と有明山の名前を見るのみです。しかしこれ以外の奥山についても須弥など一部の

人達の間では、当時名前が付けられていたのではないかと思われませんが公的記録に載る程一般的なものではなかつたでしょう。地元で、城主が、その権力の基に出版した総合書においてすら、このような状態でしたから、当時中央で出したものや、私的出版物においてはそれこそほんの二／三の山名が載っているのみのものがほとんどでした。ちなみに、一八七五年出版の「信濃村名益」に載っている後立山周辺の山名をみると「爺岳と爺鬼、有明の三山のみです。

考えてみますと、平野の中に孤立する富士山のようない単独峯や、山脈であっても、直線の単純山脈では、山名も早くから付られたりその位置もはっきりしますが、北アルプスのように山脈が重

重し、峯々が重畳して麓から遠望することもできないような奥山については、名前もはっきりしていません。あつたては、一八八〇年代になりますと、山の

から遠望することもできないような奥山については、名前もはっきりしていません。あつたては、一八八〇年代になりますと、山の

この頃には信州教育は全国の先端を行く程充実し、特に博物学では先進的地位を確立、一八八三年には、時の大町小学校長長渡辺敏氏、また一八八八年にはやはり大町小学校長の河野齡蔵氏と教員二名の白馬登山などがあり、一九〇二年には教員を中心に信濃博物会が結成され雑誌「信濃博物」が早くも創刊されて意気高いものがありました。(日本山岳会)の創立は、一九〇五年、雑誌「山岳」の創刊は、一九〇六年、一九〇六年には北安曇教育会でも同会独自で郡内各地をくまなく調べ、なお関連のあるものについては富山県側についても調べ、「北安曇地誌」の編集を行なっていますが、この詳細、ち密な調査でも、五竜岳や唐松岳の名前が落ちてい

(ロ) 山名の古くから固定している山  
 古い記録を調べてゆくと、名前もどうして出でてこない山とは反対に、どの記録にも必ず載つて、しかも昔から今日迄その名前の

	7	6	5	4	3	2	1	NO	NO
	爺ヶ岳	布引岳	鹿島槍	鹿島槍	鹿島槍	唐松岳	唐松岳	現山名	信濃村名益
後立山	鹿島大岳	祖父岳	爺鬼ヶ岳	屏風岳	鹿島槍	大黒岳	大黒岳	北安曇地誌	河野齡蔵
	赤沢岳	祖父岳	鹿島大岳	布引岳	唐松岳	唐松岳	唐松岳	信濃博物	白馬登山
	屏風岳	祖父岳	鹿島大岳	布引岳	唐松岳	唐松岳	唐松岳	日本山岳会	北安曇教育会
								三枝氏	津本氏
								唐松岳	大黒岳
								唐松岳	大黒岳
								唐松岳	大黒岳
								唐松岳	大黒岳
								唐松岳	大黒岳

第二表

【北アルプス北部の山古名一覽】

山名	一越	中	の	呼	名	区	域	信	州	の	呼	名
飯盛山	飯盛山	飯盛山	飯盛山	飯盛山	飯盛山	飯盛山	飯盛山	飯盛山	飯盛山	飯盛山	飯盛山	飯盛山
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

全く変らないしつかりした山もあり、とかく不正確不明瞭な古山名の中で、これらの山の名前を見る時ほとんど嬉しくなります。これらの山は郡の北端と南端の山で、服、横、前倉、風吹、乗鞍岳と飯盛、有明山の六つです。現在の北アルプス北部の山の盟主として誰でも知っている白馬岳や鹿島槍と比べてみる時、昔の名山は今と全く異なっていたことに気づきます。

(一) 混同し安い同名異山  
山の名前は固有名称詞でありませんが、人間の名前などと同じようにつけ安い名前があるようで、後立山周辺の山についてだけでも、乗鞍、レンゲ、飯鬼、ヤリ、鳥帽子、五六、朝日岳といった同名のものが見られ、これらの山は近くにあり、ため時として聞き違えたり、取り違えたりして記録の錯綜や境界紛争の基となつたと思われる例が沢山ありますが、これは

はちやうど同名の人が近くにあった場合間違つて郵便物が時々届けられるようなもので、乗鞍岳については信府統計に詳細に載っており、「乗鞍岳の名称本領の中に三ヶ所あり、一つは南西隅にある山(筆者注:コロナ観測所のある山)なり。一つは此の山(筆者注:中土駅西の石坂部落の西にある山で低い山)にて越後境にあり、また一つは:大町組塩島新田村の西北にあり(筆者注:現大日岳の隣りの乗鞍岳)享保七年山見通しのこと仰せつかまつりたる山のつなり」とあり当時境界紛争がおこつて、幕府から調定の役人が出張して来たわけですが、この起りは元録の絵図では石坂の西の乗鞍岳が国境にある大山、今の白馬大池のある乗鞍岳は、塩島新田村の中にあり、国境線にあるような大きな山に絵図ではなっていないので紛争の基となつたわけだ。

ところで、当時乗鞍岳という山はこればかりではありませんでした。富山側では今の清水岳のことを乗鞍岳と言っていたし、鹿島槍のことも乗鞍岳と言った時代がありました。このように近くに同名の山が幾つかあったので、当時の書物にはよく山の順序を誤つて記したものがみられます。

次にヤリケ岳という名前も尖峯を持つ山に好んでつけられたようで、ヤリという名前の山を北から上げると、現在の白馬岳、旭岳、鐘ヶ岳、鹿島槍があり、時に混同して伝えられていたようで、「北安曇地誌」は現鐘ヶ岳に対して「北槍ヶ岳」の名称で呼び、「北城村の槍ヶ岳に北の字を冠したるは、郡中に同名の山二個あるにより、信府統計の説に従ひてこれを分つによる」と附記し、なお「長野県統計書此の山を白馬岳又は鹿島槍とせるは誤りなり」と注書きを附してあります。

(山博調査員)



# 慎太郎さんを偲ぶ

平 林 武 夫

大正十二年といえは今から四十五年も前のことである。私は当時の大町中学校の五年生だった。この年の七月初旬に生徒一行三十余名と針の木、蓮華の登山をした私は二回目でもあり、五年生ということでリーダー格をとめた。この頃はまだ大沢小屋はなく石室の中に泊ったことを覚えている。当時の中学生はまだ誰もリックサックというものを持ってはいなかった。学生の肩掛けカバンに風呂敷包みを十文字に背負ってゴザに地下足袋巻脚絆、長い金剛杖に学生帽、という出立であった。案内人は当時腕きみの北沢清であった。

この時は帰路大雨に遭って扇沢が大水で徒渉に骨を折った。巻脚絆をつなぎ合わせて私の身体に巻き他方を大勢が持って私は裸で扇沢の濁流を泳ぎ向う岸に着いて今度は案内人の切った材木を確保して橋を架ける段取りをしたこの時雨の中を下から登って来た数名の登山者があった。

勿論スッポリ油紙を頭から被ってはいいたがその下にはレインコートを着、リックサックを背負いビッケルを持っていた二人が混っていた。あとの二人はハッピー姿の案内人であった。このレインコートの主が百瀬慎太郎さんと弟の孝男さん(当時松本高校)であった。

大町五年間の間には勿論顔もみたことはあったであろうが親しく話したことはなかった。今日始めて徒渉の指導をして貰ったので谷々の増水の様子などを話して貰ったのであるが、とにかく百瀬さんの山姿に接した先輩としての指導を受けたのはこれが始めてであった。

この年の九月一日ちょうど第二学期の始業

の日であった、大掃除があつてまさに昼飯になろうとした瞬間大きな地震に見舞われた。

これが関東大地震であった。記録によると百瀬さんはその折は山にいて関東大地震の報をうけてリックを背負ったまま義兄の見舞に上京されたとある。

それから数日大町の駅へは東京方面から郷里へ引き上げる被災者が段々と増して来た。その焼け出された被災者の中にリックサックを背負った人達が相当にあつた。中学を卒業して私は郷里を離れて学生生活にはいり又仔細の關係でしばらく山から遠ざかった。再び大町に任を得て帰ったのが昭和四年であった

私は対山館を訪ねた。帳場には慎太郎さんの父謹吾翁が座って居られた。慎太郎さんとは以来時々というよりはひっきりなしにお会いしたと言った方がよいかも知れない。慎太郎さんの山友達の方が来られると電話で私を呼んで紹介してくれた。松方さんともお会いした冠松次郎さんとも引き合わせていただいた。昭和五年に大町スキークラブを結成した時などは毎晩のように対山館に集った。慎太郎さんはそうした仲間の指導者として実に適切な考えを述べて若い者を指導して下さった。

慎太郎さんは酒を好んだ、しかし慎太郎さんは乱に及ぶ酒ではなかった。実に楽しく語り合う酒だった、一面の淋しさの中に強いて興を求めていたようにも思われた。

酔うにつれ興に乗ると唄が出た、慎太郎さんの唄はウ派なものだった。手品が出た、これも堂にいったものだった。めったに見なかつたがアシカ踊りがあつた。これこそ誰にも真似の出来ない芸であつた。

今更こゝで述べるまでもなく慎太郎さんの歌は本当に心打たれる秀歌が多かつた。鎌倉に親友山田珠樹博士(仏文学東大教授)を訪ねた時の一首、平常の酒、山小舎の酒、晩年の酒と

源左衛門常世が裔にあらねども鎌倉にはせ酒を賜る。

いつしかに二階の客も寝しづまり 更けし茶の間に一人酒つぐ

爐はあかし汁はも美し酒ありて いう言もなし鳥よなげく

配給の酒の尽ぎれば遠去りし人 思うことただに寂しき

私の心に残る慎太郎さんの酒の歌を思い出すまゝに記しても数限りない。対山館の帳場に座っていた着流しの慎太郎さんの姿がまづ目

慎太郎祭(六月九日針ノ木雪溪にて)



に浮ぶ、どこか深みのある思索の人であつた。表現は難しいが一介の宿屋の主人ではなかつた。中折帽に二重まわしの姿もなつかしい、それよりも鳥打帽に登山服の慎太郎さんの姿はひいき目のせいか一番深く私の心に残っている。或夏の一夜、蓮華岳の頂上で線香花火に火をつけて子供のように興じた事を覚えている。「この花火の灯がうちの物干台に見えるだろうか」四人の子供を案ずる親心を私は慎太郎さんの心底に見出したような気がした。針の木の慎太郎祭でもちやんなの花火をあげるのもこの慎太郎さんへのさゝやかなお供である。慎太郎さんは心の強いインテリゲンチヤであつたとつくづく思う。

(大町山岳会長)

お願い「山と博物館」の購読者をつのっております。年間三〇〇円(送料共)大町山岳博物館宛お送り下さい。(切手は不可)

## 表紙説明

燕 岳 撮影 堀 勝彦

山と博物館 第13巻第6号

一九六八年 六月二十五日発行

発行所 長野県大町市T B I 大町②二一

大町山岳博物館

印刷所 大町市下仲町

大糸タイムス印刷部

定価 年額 三〇〇円 (送料共)